

# 帝都地下迷宮

中山七里

## 第三回

### 第二章 汽車は煙を噴き立てて

1

一夜明けて目覚めてみると、昨夜のことは夢だったように思えた。

部屋のカーテンからは朝陽が射し込み、窓を開けて外を見れば見慣れた通勤風景が目の前を流れていく。

なべて世は事もなし。テレビも新聞もネットも政治家の失言とタレントの不倫を報じるばかりで、地下空間に人が住んでいることはひと言も触れずにいる。

まさか、本当に夢を見ていたのかもしれない——小日向は慌てて、こひなた昨夜帰るなり脱ぎ捨てたジーンズのポケットをまさぐった。

指先が紙片に触れる。取り出したのはコンビニエンスストアのシートだ。

萬世橋まんせいばし駅を出た後、香澄かすみの買い出しに付き合わされた。一人では持ちきれない買物というのは本当で、食料品から日用雑貨、果ては下着に至るまでカゴ二つが満杯になるほど買い込んだ。

精算する際、色々と迷惑をかけたので支払いを申し出ると、香澄はあっさりとは応諾した。その時のレシートがこれだ。長さ十五センチに亘って品名がずらりと並ぶ。とても独り者が一度にする買物ではなく、しかも品物が自分の部屋には一つとして残っていない。間違ひなく小日向えんじょうが遠城香澄と出逢った証拠だった。

小日向はスマートフォンを取り出して、画像を検索する。萬世橋駅を写した画像は一枚も残っていない。香澄に見つかる前に撮影していた写真は、解放された時に全て削除させられた。(「特別市民」といえども真正の住人ではない小日向は、まだ十全の信用がないのだろう。

最初は恐怖でしかなかったものが、馴染めば魅力に変わることがままある。恐怖を抱いて見る目には恐怖しか映らないからだろう。だから恐怖が消えた途端に、本来の姿が見えてくる。小日向にとっては地下空間がちょうどそれに当たる。

地上に住まう者が想像だにしない地下都市。都市と称するには狭

すぎるといふのならコミュニケーションと言い直してもいい。一千三百万都市の真下に、知られざる居住区が存在するというのは、憧憬しょうけいにも似たロマンがある。少年の日に一度は夢想した〈秘密基地〉が現実として存在しているのだから、胸騒ほこりぎしないはずがない。

思い起こせば鉄と埃ほこりの臭よみがえいが甦よみがえる。肌が乾いた空気を反芻はんすうする。

区役所は土日・祝日閉館だから、差し当たって今日と明日は何の予定も入っていない。

もう一度行ってみよう——決心するのに数秒も要しなかった。小日向はすぐにLINEで香澄に連絡してみる。

『また行きたい。入れてくれるかな？』

じりじりと待っていても、なかなか返信が来ない。現在時刻は午後一時三十五分。そう言えば地下の住民たちは深夜に活動していたので、昼間は寝ているのかもしれない。

十分経ち二十分経っても返信はない。いっそ昨夜と同様に萬世橋駅上の通風口から侵入してやろうかと思ったが、香澄の警告を思い出した。

『万世橋署のお巡りさんにバレたらどうするつもりよ。小日向さんは社会的信用失くすだけでいいかもしれないけど、あたしたちは居場所失うのよ。二度とグレーチングを外そうとしないで』

それならどうやって地下に行けばいいのかと問うと、香澄は「ヘエ

クスプロローラー専用の出入口があるのだと言う。

『ちゃんと教えてあげるから。自分で無理に探し出そうなんて考えないでよね』

しかも入国手続きなるものまで存在するらしい。

『所謂いわゆる〈特別市民〉と認定されているのは間宮先生まみやとあなた二人だけなんだけど、与えられた義務と権利は一般市民と同じ。出入りは必ず決められた場所から。一度の出入国は五人まで』

一度に大勢が移動すれば怪しまれるというのは理解できた。しかし〈エキスプロローラー〉と彼らの自治や禁則については、まだほとんど何も知らされていない。知らされないというのは、逆に言えば信用されていないからだ。こちらが決まり事に忠実で、相手に敬意を抱いているのが分かって初めてルールが適用される。

まさかこのまま無視なんてことはないだろうな——不安に駆られ始めた頃、ようやく香澄から返信がきた。

『おはよ。来るのは構わないけど、もう少し後にして。今、起きたばかりだから』

『いつならいいんだよ』

『三時。とりあえず銀座線神田駅で待ってて。こっちから連絡するから』

そう言えば久きゆうジイたちのいた地点は神田駅寄りだったような気

がする。それでは専用の出入口は神田駅付近にあるのだろうか。

未だに謎めいたことだらけだが、恐怖心よりも好奇心の方が強い。

小日向は鼻歌を歌いながら外出の支度を始めた。

逸る気持ちを抑えきれず、約束の十分前には神田駅に到着してしまつた。ひと口に神田駅と言っても入口が1番から6番まであり、構内も広い。いったいどこで待っていればいいのか。とりあえず構内に入って連絡を待つことにした。

土曜日の昼下がり、通勤通学客の姿は見えないが、銀座や浅草方面へ繰り出す買い物客やカップルが目立つ。一人壁もたに凭れて所在なげにしている自分は、彼女待ちの間抜け面に映っているのかもしれない。

手持ち無沙汰だったので、色々なことを考える。まず「エクスプローラー」専用の出入口はどこに存在するのか。

昨夜香澄や永沢ながさわと巡った萬世橋の線路は神田に続いているし、香澄の指示も神田駅で待てというものだ。出入口が神田駅にあるのは間違いない。

銀座線神田駅は小日向もよく知る駅だ。出入口に改札の位置、トイレの場所まで目を閉じれば構内図が浮かんでくるほど熟知している。だが人知れず行き来できそうなドアなど一つも思いつかない。

まさかホームから線路に飛び降りて、そのまま万世橋方向に歩けというのか。それでは他の利用者に目撃されるし、第一駅員が放っておいてくれない。たちまち数人で取り押さえられ、駅長室か警察署に連行されるのがオチだ。いや、まさか東京メトロの職員全員がヘエクスプローラーの存在を承知していて、駅長室から直に出入りできるとか――。

あまりの荒唐無稽こうとうむげいさに苦笑する。それこそ都市伝説・妄想たぐの類ではないか。メトロの職員が承知している事実なら、香澄たちも深夜に活動しているはずがない。線路からこっそりと電気を拝借する必要もない。

あれこれ考えていると、ようやく香澄から着信がきた。

「待ってた」

『小日向さん、今どこ』

「銀座駅の構内だけど」

『1番出口を下りたところに証明写真ボックスがあるから、その前で待機してて』

小日向は指示通り構内を移動する。1番出口はJR神田駅の改札近くに位置しており、六つの出入口では最も多く利用されている。言ってみれば一番目撃される確率が高い場所でもある。そんな場所に呼び出して、香澄は自分に何をさせようというのか。

証明写真ボックスの前まで来て、連絡を再開する。

「今、到着した」

『ボックス、誰か使用中？』

「いや」

『中に入って』

命じられるままボックスの中に身を滑り込ませ、左手でカーテンを閉める。正面の小さな鏡には間抜け面をした自分が映っている。

「入った」

『カーテンは』

「閉めた」

小日向が答えた瞬間だった。

何の前触れもなく右の壁が外側に開いた。

声も上げられずにいると、壁の隙間から香澄が顔を覗かせた。

「おーまたせっ」

「……びっくりした」

「そんな暇ないわよ。さっ、早く」

香澄に腕を取られ、開いた壁の向こう側に引っ張られる。香澄が立っていたのは天井の低い通路で、光源は広い間隔で設えられた薄暗い蛍光灯だった。

「ようこそ」

「びっくりした」

「持続力あるのね。子供みたい」

「誰だって驚く」

改めて自分の出てきた跡を眺める。ボックス内から見ればただの壁だが、通路側にはちゃんとノブがついている。通路側からしか開けられないようになっていたのだ。閉めると構内側からは全く光が洩れなくなるので、隙間がないのが分かる。

なるほど、と心中で膝を打つ。証明写真ボックスなら出入りしても怪しまれない。時間帯さえ考慮すれば続けて何人もが外に出られる。

「でも、ボックス使用中に扉を開けちゃう惧れはないのかい」

「対策済み。扉の下に覗き窓があつて、使用中なら中にいる人の足が見える」

「あんな隠し扉、いつの間につつたんだよ」

「あたしが生まれるずっと前」

「……萬世橋駅ができた当初ってことか」

「じゃあ、出発進行ー」

公共施設はLED標準装備の今日び、いつ切れるか分からない蛍光灯にコンクリート剥き出しの擁壁ようへき。香澄を先頭に進むにつれ、この通路の正体が徐々に見えてきた。



「元は作業員用通路だったのか？」

「当たり前」

トンネル工事の際、機材搬入や作業員通路として坑内の外側に別のトンネルが作られる。もちろん竣工しゅんこうの際に潰つぶしてしまうのが普通だ。ただし中には様々な理由で潰つぶさずに残したものもあるという。おそらくこの通路もそのうちの一つなのだろう。

「あたしもよく知らないんだけどさ。工事が重なったり工期が遅れたり、ひどい時には予算がいっぱいいっぱいだから、そんな後始末する余裕なかったんじゃないのお？」

何とも呆気あつけない可能性だが、案外現実には香澄の考え通りかもしれない。なかつた。

それで不意に思い出した。

「なあ、香澄ちゃん。これと同じ道路が旧新橋駅の辺りにもあるんじゃないのか」

「あー、あるよ」

「ひよつとしてトロツコとかも使ってやしないか」

「あたしはやったことないけど、大荷物運ぶ時には運搬車みたいなものを使うよ。へえ、あれがトロツコっていうんだ」

旧新橋駅で壁の向こう側から聞こえたのは、〈エクスプローラー〉たちがモノを運ぶ音だったのか。

これで一つ謎が解けた。だが、代わりに新しい謎がいくつも思い浮かぶ。質問をぶつけたら、香澄やその他の住民たちはどこまで答えてくれるのだろうか。

「だけど物好きよねー、小日向さんも」

「何が」

「普通さ、あたしたちみたいに得体えたいの知れないのと関わったら、なるべく近寄ろうとはしなくなるよ。自分の密かな趣味をバラされる危険も顧みず、ますます接触してくるなんて」

「鉄オタだから、って説明じゃ不足か」

「不足じゃないけど、それだとオタクってとんでもない変わり者って意味になるよ」

「……まあ、あまり違っちゃいない」

「で、今日は何の目的でやってきたの」

「僕は〈特別市民〉なんだろ。自分の町に来ちゃいけない理由でもあるのかい」

香澄は首を横に振る。前を歩いているので表情は分からないが、多分苦々しい顔をしているのではないか。

しばらく歩いていると急に前方の視界が開けた。昨夜見たのと同じ地下空間が広がっていた。歩いた感覚では神田駅から百メートル足らずといったところか。

「万世橋まではまだ距離があるみたいだな」

「百人が住んでんのよ。これでもまだ狭いって文句言ってる人がいるくらい」

住まいに話が及んだのをいいことに、小日向はずっと気になっていることを訊いてみる。

「住んでいるっていうけど、まさか百人とも住所はここに設定しているのかい。〈萬世橋駅跡〉じゃ郵便も届かないだろう」

「こんなところに誰も配達しに來ないわよー。郵便どころかピザ屋の配達もね」

「じゃあ郵便物とかは、いったいどうするんだよ」

「別に困ってないよ。ちゃんと本宅に届いているもの」

「本宅？　ここ以外に住所があるっていうのか」

「頭よさそうに見えたけど、結構観察力ないね」

香澄は振り返って、挑発するように歯を見せる。

「昨夜、色んな人を見たり話したりしたでしょ。全部で百人もいた？」

「いや……そうか、住人の何割かは本宅に帰っていったってことか」

「そう。だから今の時間はフルで人がいるから、そのつもりでいてね」

「こここの住人は何して生活しているんだよ」

だがいくら待っても香澄の返事はない。まさか彼女が知らないはずもないので、これは回答拒否とみていいだろう。やがて向こう側に見覚えのある顔を見つけた。永沢だった。

「何だ、もう来たのかよ。えらく早い二度目だな」

香澄と同様、小日向が変人に思えたらしく永沢は珍獣を見るような目をしていた。

「昨日の今日……じゃなかった。本日二度目じゃねえか」

「えっと、自分的には結構居心地がよくって」

「居心地いいだって。こんなに暗くて埃臭い場所がかよ。本当に変わってんな」

永沢の話しぶりを見ると、香澄よりも警戒心が希薄きはくに思える。それなら彼に質問する方が手っ取り早いかもしれない。

「僕は土日休みなもので。永沢さんですか」

「俺かい？ いや、俺はあんたみたいに公務員じゃないよ。夜間の工事現場だからな。ちようど起きてきたとこだ」

「じゃあ昨夜は」

「仕事が終わった直後だったさ。あんたが闖入ちんにゆうしたせいで、こっちは少々寝不足だ」

文句を言っている割に口調は快活なので、心底迷惑ではなかったらしい。

「待てよ。そう言や、あんた生活保護の担当だったな。いいタイミングで来てくれた」

「え」

「久ジイが困ってたんだよ、そういうのに詳しいヤツはいないかって。間宮先生だって生活保護にまで詳しくないだろうから、どうしようかと思ってたところに、あんたがまた来た。棚ボタつつうか渡りに船つつうか」

多分両方とも違うと思ったが、口には出さずにいた。

「早速で悪いが、今からついてきてくれや」

昨夜〈特別市民〉に認定されたばかりの小日向には拒否権などない。半ば無理やりといった体で、永沢に引つ張られていく。後ろからは香澄がついてくる。

「どうして君までついてくるのさ」

「〈特別市民〉さんが、どこまで久ジイの期待に応えられるかと思っ  
て。あのさあ、久ジイって人に対する評価はシビアだからね」

「評価が低かったら、どうなるんだ」

「市民については能力の高い低いなんて関係ないけどさ。〈特別市民〉なら話が違ってくるよね。やっぱり人より秀でたものがなければ、恩典がつくはずもないし」

「急にそんなこと言われても」

小日向の慌てぶりを見て、香澄はにやにやと笑う。畜生、昨夜買  
い物の代金払ってやった恩を忘れたのか。

昨夜と同じようなシチュエーションで歩いていると、まるでアパ  
ートに戻っていた時間が嘘のように思えてくる。好奇心猫を殺すと  
いうのはこういうことだろうかと反省する。

やがて記憶に新しい場所に辿り着いた。言うまでもなく久ジイの  
居住区域だった。

見れば久ジイは女性と話していた。年齢は六十過ぎだろうか、構  
内の暗さも手伝って幽鬼のような顔立ちに見える。

「ほう、小日向さん。昨日の今日で再訪とは、よほどここが気に入  
ったとみえる」

「久ジイ、こいつは区役所で生活保護申請の窓口担当だ。うってつ  
けじゃないか」

「ああ、その通りだな」

久ジイは顎あごを撫でながらこちらを見上げる。(特別市民)の資格を  
与えたのだから、義務を果たせと命じる目だった。

「小日向さんよ。これは霜月径しもつきぢやう子さんといってこの住人なんだが、  
生活保護の件で困つとる。何度も申請してみたが、その度にはねら  
れる。何とかならんもんかな」

久ジイは傍かたわらの椅子を勧めてきた。生活保護受給に関する相談ご

とは小日向の日常業務でもある。非日常の空間で日常の業務をこなすことへの違和感を覚えながら、径子の対面に座る。

「申請書、お持ちですか」

径子は不貞腐れるようにして紙片を差し出す。困っているという説明だったが、本人はかなりやさぐれているように見える。

申請書で押さえるべきポイントは熟知している。要は申請者がどこからカネを工面くめんできないか。そして生活困窮者であることを客観的に説明できるかどうかが目目になる。

別の言い方をすれば、「生活保護を受給しなくてもよい」事由が存在するか否だ。予算の逼迫ひつぱくする社会保障行政では、どうしても申請を認可するよりも却下する方に重点が置かれる。窓口を訪れた申請者を受け容れるよりも、記載内容の粗あらを探るのが目的になってしまう。

小日向が書類を繰る度、目の前に座る径子はおどおどと怖気ついていくようだ。おそらく窓口で書類を突き返された体験が甦よみがえるのだろうか。

申請窓口を訪れる者の多くは劣等感と申し訳なさを顔に貼りつけてくる。国の世話になるのが情けない、他人の税金で生活するのが恐びないという顔をする。国の制度だから堂々としていれればいいと思うのだが、社会的弱者と認定される負い目からどうしても卑屈ひくに

なる。山形などは、その負い目につけ込んで主導権を握るべきだと説諭するが、小日向は受け容れ難い。

まず足切りをするつもりで粗を探す。すると突つ込むところがすぐに見つかった。

「霜月さん、届け出の住所は足立区あだちですけど、住民票上の住所地は福井県敦賀市つるがになってますよね」

「はあ」

初めて聞く径子の声は暖かれていた。

「実家、ちゆうのか、元はそこに住んでたんですけど、住めなくなつたからこつちに越してきたんです」

「敦賀の土地は売却も譲渡もしていないですよね」

「あんな土地は売れんし、誰も引き取りたがらないですよ。不便な場所だし」

「そこに霜月さんがご家族と住んでいたんですか」

「家族っていつでも出来損ないの息子と二人きりなんだけどね。その息子も家を出ていったきり、今ではどこで何をしているか見当もつきやしない」

「それで霜月さんが单身東京にやってきた訳ですね。職業欄が空白ですけど、何か就業に支障のある持病をお持ちですか」

不意に径子は黙り込む。気まずそうに久ジイの方を二瞥いちべつして、俯うつむ



き加減になる。

「大した病気は持ってないけど、この齡じゃあなかなか見つからなくて」

「足立区の住まいはどんなところですか」

「月二万四千円の安アパート」

「家賃や生活費は貯金を取り崩してるんですね」

「年寄り一人だからそんなに掛からないんだけど、出る一方じゃあねえ……」

「申請、何度却下されましたか」

「三回」

「このままじゃ何度申請し直しても同じことですよ」

今度はアドバイザーの立場に切り替えて話す。見つけ出した粗を解消させればいいだけの話だ。

「就業していないこと、扶養してもらえる家族が存命していることも却下の要因ですが、一番の問題は敦賀にある自宅です。資産である土地を何故居住用に供しないのか。居住用に供しないのであれば、たとえ二束三文であったとしても何故売却しないのか。言い換えるなら、敦賀と東京の二重生活をしているうちは、生活保護申請が通ることはないでしょう」

現場の担当者としては真つ当な意見を述べたつもりだった。だが

径子と久ジイばかりか、永沢と香澄の反応も微妙だった。触れてはいけない場所に、無造作に手を突っ込んだような気まずい空気が流れる。

小日向さんよ、と久ジイが口を開く。

「あんた、どこの生まれだね」

「栃木ですけど」

「親御さんはご存命かね」

「ええ、栃木の実家に住んでますけど、それが何か」

「あんたは、今までに何か大切なものを取り上げられたことがあるかね。失くすんじゃない。無理やり誰かに取り上げられて、しかも返してくれないという経験だ」

「……ちよつと思いつきません」

「だから径子さんの気持ちも分からんのだろうなあ」

久ジイは半ば非難、半ば同情するような視線をこちらに向けた。

「あんたのアドバイスは的確だと思う。ありがとうよ。しかしな、的確だからといって正しいとは限らん」

「どういうことでしょうか」

「あんたの知恵では径子さんを助けられんということさ。いや、ご苦労さん」

久ジイはもう行ってもいいというように片手を振る。小日向を連

れてきた永沢は面目なさげに頭を掻く。

必要だと言われたからついてきたのに、あっさり役立たずの烙印らくいんを押されてしまった。小日向としては納得がいかないが、久ジイから去れと言われたら従うしかない。

「えー、小日向くんよ」

久ジイのいる場所から遠ざかると、永沢が弁解がましく声を掛け  
てきた。

「無駄足踏ませて悪かったな。良かれと思って連れていったんだが  
（あんた）から（小日向くん）に格上げしたのは、せめてもの謝意  
の表れなのか。

「謝んなくていいですよ。どうせ役立たずですから」

「拗すねるなよ。それにしても二つの住所を持っていると生活保護が  
受けられないってのはなあ」

「土地や建物は資産ですからね。居住地以外の土地を所有していれ  
ば、生活保護の受給は難しいです」

「それなら俺たち全員、生活保護は受けられないってこった」

全員？

聞き咎とがめて永沢を見ると、本人はしまったという風に口を押さえ  
ていた。

「みんなが都内以外にも住まいを持っているんですか」

「……俺たちと付き合っていくうち、おいおい分かる。あんまり根掘り葉掘り訊こうとするなよ」

しばらく歩くと、ここに百人からの人間が住んでいるのが実感できた。

構内の両端にずらりとテントが並んでいる。昨夜は目にしていなかったので、小日向が立ち去ってから出現したものと分かる。一瞬、ホームレスのテント村を連想したが、あれよりはずいぶんと秩序がある。テントの大きさは様々だが、等間隔に作られているので整然とした印象がある。

「壮観だな、これは」

「そりゃあ、百人分のテントだからな。壮観にもなるわさ」

「それにしても、よく今までバレませんでしたね。いくら廃駅だからといっても、時折検査やら何やらでメトロの職員がやってくることもあるでしょうに」

「そういう時のために、手早く撤収できるようにテントを張ってる。

それに協力者だっているしな」

「協力者？」

詳しく訊こうとしたが、永沢はまたしまったという顔をして口を噤む。

「なるべく静かにしてよね。みんな、まだ寝てるんだから」

香澄は人差し指を自分の唇に当てる。

「あたしはまだ早起きの方だけど、この人たちは夕方まで寝ているから」

「まるつきり昼夜逆転だな。そんなんでやっていけるの」

これには永沢が応えた。

「何とかやってるさ。東京はいいよな。夜間の仕事がうなるほどある。夜間工事、警備員、病院の宿直、コンビニ店員……だから夜働いて昼間に寝ていられる。そういう生活しているのは別に俺たちだけじゃないだろ」

「フクロウみたいな生活しているのは少なくないでしょうね」

「まあ、俺たちはフクロウというよりコウモリなんだけどな」

妙な言い回しをするものだと思っていると、横から声を掛けてくる者がいた。

「おや、見掛けない顔だね。あんたが噂の〈特別市民〉かい」

声のした方に振り向くと、ワンカップを高々と掲げた女がそこにいた。

「越してきたなら隣人に挨拶するのがスジってもんだろ。こっち来

なよ、お兄さん」

口調はべらんめえだが、よく見れば三十代前半の美人顔だ。

「何、ぼけつと突っ立ってるんだ。別に取って食おうってんじゃないから」

薄暗がりで見れば判然としないまでも、いい具合に酩酊めいていしているようだ。酔漢すいかんに近づく趣味はないが、酔っているのが女性なら話は別だ。小日向はついふらふらと彼女に引き寄せられる。

「名前は？ お兄さん」

「小日向。小日向巧たくみと言います」

「わたしは黒沢輝美くろさわてるみ。よろしくね、〈特別市民〉さん。ところで、どうして〈特別市民〉にさせられたのよ」

小日向が問われるままに経緯を説明すると、輝美は顔を上げて豪快に笑ってみせた。

「結果的にはよかったじゃん。趣味の廃駅が生活の場になるなんて、マニアには本望じゃないのさ」

輝美の手が小日向の背中を叩く。華奢みやしやな腕うでにも拘かかわらず力は相当なもの、小日向は堪たまらず咳き込む。

「まあ、お近づきに一杯」

「いや、あの」

「この時間、ここにいてるってことはヒマなんだろう」

輝美は手元にあった別のワンカップを無造作に突き出す。優柔不断な小日向は、ここでも拒否権がない。気が進まないのを堪えてビシに手を伸ばす。

「乾杯——」

輝美の声が構内に響き渡り、永沢と香澄は呆れ顔で傍観している。

「永沢さんも飲むかい」

「いやあ、俺は昼日中からはちょっと……」

「それじゃあ香澄ちゃんとはと……ああ、お子ちゃまだからダメだったのよねー。ごめんごめん」

何が気に障ったのか、香澄はものも言わずに背を向けると、向こう側へすたすた歩き出した。

「大人は大人同士で呑んでくれていて」

「おい、香澄ちゃん」

去っていく香澄の後ろを永沢が追い掛ける。後に残されたかたちの小日向は、輝美に付き合うしかない。

「僕、あまりいけるクチじゃありませんよ」

「いいき。わたしも小日向さんが正体失くすまで付き合ってもらおうつもりはないから。いや、逆に正体失くしてもらおうと困る。これか

ら質問に答えてもらわなきゃならないもの」

「質問？ 今会ったばかりじゃないですか」

「会ったばかりだから色々腑ふに落ちないんだよ」

豪放なのはそのまま、輝美は小日向を逃がすまいと目を光らせる。酔眼とまではいかないものの、充血気味の眼たまに睨にらまれていると威圧感を覚える。

「廃駅が趣味の鉄オタで、たまたま侵入した萬世橋駅で「ヘクスプローラー」を目撃しただって？ あのさ、嘔吐おうとくんなら、もう少しマシな嘔吐おうときなよ。何で区役所職員みたいな身元のきちんとした人間が、趣味ごときで不法侵入するのよ。どうしてそもそも、どうして電車の走らない廃駅に興味なんて持てるのよ。そんなの全部後付けの理由でしょ。本当のことを言いなさい、本当のことを」

輝美の目は猜疑さいぎ心に凝り固こまっている。

小日向は生涯で何度目かの疎外感に落ち込む。同性に鉄道オタクの真髓しんずいを説明するのも困難なのに、女性に廃駅オタクの魅力を説くなど、異星人にくさやの干物の美味しさを理解させるようなものだ。

オタクの特質とは蒞蓄うんちくと収集であり、両方とも女性には縁遠いものだと小日向は思っている。しかも輝美はアルコールが入っているので、状況は最悪だ。

「えっとですね」



それでも小日向はオタク視点での説明を試みる。住人に胡散臭く  
思われたまま過ごすのは御免だと思った。

「既に廃止された駅、電車の通らない駅というのは言ってみれば死  
体みたいなもので、それを愛めでるとするのは懐古趣味というより、  
最近の廃墟ブームに似てネクロフィリア（死体愛好家）の一つと断  
じる向きもありますが決してそれだけのことではなく、高度成長期  
の日本に思いを馳はせるというか、過ぎ去ったものへの郷愁というの  
は間違いなくあると思うんです。元より駅というのは物流の主軸で  
あって、その廃墟というのは取りも直さず物流の統合・廃止延ひいて  
はヒト・モノ・カネの流れがこの数十年でどれだけ変化したのかと  
いう象徴でもある訳です。何というかそういう経済学視点で廃駅を  
考察するというのは考現学にも通じる考えであり廃駅になった背景  
と理由を考察することは未来の物流を思考する材料にもなると思っ  
んですただしこれはいささかこじつけの感があり個人的には廃駅の  
うらびれた様子だとか誰も立たないプラットホームや錆さびついた線  
路には寂寥せきりょうかん感が滲にじみ出ている……」

喋っている途中から夢中になり、いつしか脳の命令を無視して口  
が勝手に動き出す。考えてみれば自分の趣味を何の衒てらいもなく話す  
のは、そうそうあることではない。

趣味を語るのは自らを語ることだ。今まで密かに廃駅趣味を愉し

んできたが、言い換えれば自分を隠し偽ってきた。それが今、必要に駆られてという状況ながら思う存分開陳かいちんできる。

何という解放感かと思う。思いを躊躇ちゆうちよなく吐露とろするのが、こんなに快感だったとは。

輝美の表情が次第に胡散臭さから気味悪さに変わってきて、小日向は喋るのをやめようとしな。遂に輝美は片手を突き出して小日向の言葉を遮せきった。

「あー、もういい。もういいから、説明ストップ」

「いや、まだ足りないんじゃないかと」

「小日向さんの廃駅にかける情熱がどんなものかは分かったし、これ以上説明聞いても理解できないのも分かった。だから、もう喋るなくていい」

理解はされずとも納得はしてくれたようだ。若干じやつかんの不満は残るものの、小日向はひとまず説明責任を果たして安堵あんどする。

「わたしの周りには鉄オタとかいないから、も一つ実在感とか摺つかめなかったんだけど、今ので大体把握できた。要するにアレだ。わたしには分かり合えない領域だわ」

輝美は気を取り直すように、またカップの中身を呷る。

自らを曝ひらけ出したのは予想外な心地良さだった。しかし一方、こちらの情報を提供しただけという不満もある。相手がひと息吐いた

のを見計らい、今度は小日向から質問をぶつけてみる。香澄や永沢が渋る答えでも、輝美なら吐き出してくれそうな気がする。

「じゃあ、今度は僕が質問する番ですよね」

「ああ？」

「昨日、迷い込んで、半ば強引なかたちで〈特別市民〉に認定されて、訳分らないままなんですよ。住人のことを訊ねようとしても、みんな微妙に避けてくるし、これじゃあ体のいい監禁ですよ」

「そりゃあ、こんな地下に隠れて暮らしているんだ。明け透けに言えないことの一つや二つはあるさ」

「そんなんで友好関係なんて結べる訳がない」

「別に友好関係結ぼうとして引き摺り込んだんじゃないだろ。久ジイにしてみれば秘密を護りつつ、話を大ごとにしたくなかっただけのことだ」

見下すように言われると、さすがにいい気持ちはしない。だから、つい嗜虐的な訊き方になった。

「ひよっとしたら、地下に暮らしているのは地上の生活に支障があるからじゃないんですか」

カップを持つ輝美の手が止まる。

「鉄オタならともかく、地下での生活がそれほど快適だとは思えません。僕なりに考えてみたんですよ。地上にあって地下にないもの

を。騒音。これは地下だって電車の走行音がかなり大きいです。空気が。これも構内が澄んだ空気とは限りません。で、一つだけ決定的な相違を見つけました。太陽です」

いったん言葉を切って反応を確かめる。輝美もまた小日向の真意を確かめようと、油断のならない視線を浴びせている。

「買い出しをするにも働きに出るにも、(エクスペローラー)は太陽が沈んでから行動しています。ここの人たちは太陽光線を避けている。だから自ずと地下に潜らざるを得ない。さつき、永沢さんがうっかり洩らしたんです。自分たちはまるでコウモリだって。それでぴんとききました」

出方を待っていると、しばらくして輝美が口を開いた。

「ふうん。結構、鋭いじゃないの。じゃあ、わたしたちが太陽を苦手としている理由はどう考えているの」

「……たとえば住人全員がドラキュラの子孫だとか」

「あはははははっ」

輝美はけたたましく笑い出した。

「鋭い推理だと思ったら、結論がそんなところに落ちるのかい。言つとくけど、この先の屋台じゃニンニクの丸揚げ出してんだよ。やっぱリオタクの思考回路ってのは理解不能だ」

「そんなに悪しあ様に言うくらいなら教えてくれないじゃないでさま

すか」

「みんなが隠そうとしているのを、わたしの独断で教えられる訳ないじゃない」

輝美はカップに残っていた中身を一気に飲み干すと、下品な息を吐き散らかした。

「他人に言いたくないから、口を閉ざしているんだ。どうしても知りたかったら他人でなくなるか、さもなきゃ向こうから言わせるように持っていくしかないだろ」

酔っ払いの言葉ながらも説得力があり反駁はんぱくできない。

「別に期限があるじゃなし、気長に付き合えばいいさ。この連中は知られたくないことはあるけど、気難しくはないからね。一緒に飲んだり騒いだりしているうちに、おいおい分かってくるさ。何でもそうだけど結果を焦ると碌ろくでもないことになる」

「……分かりました」

「念のために訊くけど、あんた本当に区役所の職員だよな。まかり間違ってもお巡りじゃないよな」

「身分証偽造のスキルなんて持ち合わせてませんよ」

「だったら、何でそんなに好奇心が強いのかねえ」

「きつとオタクだからですよ」

皮肉で返すのが、せめてもの抵抗だった。

週明けの月曜日、小日向は白シャツにネクタイを締めて登庁する。いつもと同じ時間、同じ通勤風景。人の流れに身を委ねてゆたいると、やはり香澄たちと過ごした時間が夢の中だったような錯覚おちいに陥る。自分が廃駅オタクという事実を差し引いても、それだけ地下空間での体験が非日常で魅惑的だった証拠だ。

午前八時の朝礼で山形が訓示を垂れ、今月の申請数と金額を告げる。内容だけ聞いていれば成約件数の成績発表のようだが、予算に縛られているという点では同じだ。

先週までならそれなりに真面目に聞けた訓示や数字も、今日に限っては何の興きようしゆ趣も起こらない。

「それでは今日一日、業務に邁進まいしんしてください。以上」

八時三十分、開館とともにどつと申請者がなだれ込んでくる。二つきりしかない窓口はすぐに埋まり、順番待ちのための長椅子も空席がなくなる。

申請者の相談に乗りながら、小日向の頭の中には「エクスプローラー」たちの姿が浮かぶ。久ジイや輝美の声が甦る。

『あんたの知恵では径子さんを助けられんということだ』

『どうしても知りたかったら他人でなくなるか、さもなきや向こうから言わせるように持っていくしかないだろ』

区役所勤めもはや数年、知識も得たし執務能力も上がった。社会保障行政の末端に座る者として恥ずかしくない程度には修練を積んだつもりだった。

それなのにも自分は何の役にも立たなかった。久ジイに縋すがっていた径子に対して有効なアドバイス一つ授けることができなかった。

無能、という単語が頭を駆け巡る。(「特別市民」などという称号を与えてもらいながら、その実態は単なる厄介者で、監禁された人質だった。突然の闖入者に心を許してくれた者たちに、何の返礼もできなかった。

考えれば考えるほど、自分が矮小わいしょうな存在に思えて仕方がない。

上司の命じるままに申請を握り潰し、形だけの相談に乗る職員。

およそ一般人には理解不能の趣味に現うつを抜かし、他人に胸を張って語れないマニア。いずれにしても保身に走り、自分の意思一つ貫けない臆病者ではないか。

「記載事項が不充分です。その筆記台にある記入例を参考にして、もう一度提出してください」

生活保護を申請してきた四十代の男は不満顔を隠そうともせず、席を立つ。この男が不正受給を目論もくろんでいるかどうかは問題ではない。とにかく水際で申請を却下するのが眼目がんもくだ。小日向は自分にそう言い聞かせて、次々に申請者を撥はねていく。

だが五人目の申請者で挫けた。

「また、来ましたよ」

目の前に紅林典江が座ると、小日向は平静でいられなくなった。

「あなたに言われた通り、必要な書類を揃えてきたのよ。あたし要領が悪いもんだから、それしきのことでも一日仕事になっちゃったけど」

先週、典江と約束していた。必要書類さえ揃えてくれれば、申請書類は自分が代筆してやると。

典江の顔を憶えていたのだろう。そつと背後を振り返ると、課長席から山形がこちらを注視している。

束の間、小日向は保身と職業倫理の間で葛藤する。

公務員の生殺与奪の件は上司が握っている。山形の目の前で申請書の代筆をするのは背任行為になりかねない。先週までの小日向なら、散々逡巡した上で典江に泣いてもらっただろう。

「でも無理しなくていいのよ」

典江の言葉が胸に突き刺さる。

「生活保護の申請って、これからどんどん上の方に持っていかれるんでしょ。あたしのことであなたに迷惑が掛かるのは嫌なもの」

「いや、そんなことは」

不意に、典江の姿に径子が重なった。



似ても似つかない、雰囲気も年齢も違うのに、徑子を相手にしているような気になる。

「伊達に齡を取っている訳じゃないのよ。目の前の人が正直な人なのか嘘吐きなのか。善人なのかそうでないのか。そういうことくらいは見分けられる。先週話していて分かった。あなたは、きっといい人ね」

やめてください。

声が喉まで出なかった。

僕は、あなたに褒められるような人間じゃないんです。

「生活保護を受けられる人は限られているんですよ。だったらあたしよりも困っている人を助けてやって」

もう我慢がならなかった。

「紅林さん。早く書類を見せてください」

「え？ は、はい」

戸惑い気味に典江が差し出したのは住民票をはじめとした必要書類と、生活保護申請に関わる四枚の用紙だ。

小日向は指定した必要書類が全て揃っているのを確認した後、自分でも白紙の申請書類を取り出した。一度受け付けて話も訊いている。記載事項に何をどう記入すれば申請が通るかは、とうに心得ている。

正面に典江、背後に山形の視線を浴びながら小日向は書類を完成させる。

径子には確な助言すらできず、彼らを失望させた。小日向も自身に失望した。

あんなクソみたいな気分はもう御免だ。自分は自分のできる仕事を、自分の戦場で発揮したい。自分にしかできないことで貢献したい。

「紅林さん。わたしが記入した通りに、そっちの申請書に記入してください」

特段の事情がない限り、窓口担当者が申請書を代筆するのはマニュアルに違反している。

しかし模範解答を本人が書き写すことは禁じられていない。

指示された典江はまだ戸惑っている。

「有難いと思うけど、これってカンニングじゃないかしら」

「書いてください」

小日向は半ば命令口調で言う。そうでもしなければ、己おのれの決心が挫けそうだった。

「自分が知っていることを書くだけのことです。カンニングでも何でもありません」

「そう？」

典江は半信半疑という顔をしながら、記載欄をのろのろと埋めていく。筆の運びは遅いものの、小日向の模範解答をそのままなぞっているので誤記入や過不足は見当たらない。

「小日向くん」

背後で山形が声を上げる。紛れもない警告だったが、小日向は構わず典江のペン先を見守る。

「小日向くん」

「今、受け付け中で手が放せません。申し訳ありませんが後にしてください」

山形の警告を再度あしらい、小日向は書類のチェックに余念がない。

やがて申請書類一式に遺漏がないのを確認すると、机の上で四隅を揃えた。

「書類は完備されています。受理した上、二週間以内に受給可否のお知らせをしますのでお待ちください。ただし生活保護費は申請日である本日まで遡さかのぼって支給されるので安心してください」

実質、申請が受理されればよほどの事由がない限り却下されることはない。二週間というのも最長の場合であり、平時は一週間もあれば認可される。

万が一却下されたとしたら、その時は都知事への不服審査請求を

申し立てるだけだ。上級行政庁まで話が及ぶのを殊更嫌う区役所は  
一も二もなく典江の申請を認めるに違いない。

「本当にこれで終わりなの」

「ご自宅で通知を待っていてください」

「ありがとうございます、ありがとうございます」

典江は何度もお辞儀をして帰っていく。

「小日向くん、ちよっとっ」

辛抱できないといった様子で、遂に山形が立ち上がる。

別室に連れていかれたら間違いない説教タイムが始まる。この際、  
どんな叱責を浴びようが構わない。それより何より、叱責される時  
間で相談者との時間が削られるのが疎ましかった。

「今のは、いったいどういうことだ」

山形は自分の席を離れて近づいてくる。

「金曜日にも言いましたよね。覚悟がないのなら規定もしくは組織  
の方針に従うべきだと」

「規定に外れる行為はしておりません」

感情を押し殺した声で応える。

「代筆はしませんでした。僕の作った記入例に従って、申請者が自  
筆しただけです」

何かを言おうとした山形の口が、途中で止まる。区民や他の職員

のいる前では話せない内容だったに違いない。

「後で」

そう言って、山形は自分の席に戻る。

後で何を言われるか大体の見当はついている。だが小言や悪罵あくば、  
評価ダウンが何ほどのものかと思う。

自虐じじやくめいた爽快感を覚えながら、小日向は久ジイと径子を思い出した。

「はい。次の方、どうぞ」

〈つづく〉